



印象派からカンディンスキーまで

弁護士 坂田 均
risakata@kclc.or.jp

今回は、私の趣味のひとつである近代西洋絵画史についてお話しします。印象画から抽象画に至る経過をたどると、絵画史の発展が如何に必然的で且つ皮肉に満ちたものかが分かり興味をそそります。

1、草創期

印象派の父であるマネは「草上の昼食」で、当時の日常生活の一コマに過ぎない男女のピクニックの様子を描きました。当時は、歴史的事件や宗教的逸話をテーマにした絵画にのみ価値があるとされていきましたので、アカデミーの受け止め方は極めて冷やかかなものでした。しかし、マネはこの作品を通じて新しい絵画思想を提示しています。それは、想像または仮装の世界の創造ではなく、彼が実際にその目で見た世界を描こうとするものでした。この描く対象についてのマネの現実主義的な取り組みは、その後、新古典派及びロマン派を痛烈に批判することになり、印象派への道筋をつけることになりました。

2、光のコントラスト

モネの描いた「印象・日の出」は、印象派命名の由来になった作品ですが、この作品はある意味でマネの現実主義を更に一步進めたものです。モネはこの作品で、実際に自分の目に映った太陽の光の色があるがままにキャンパスに映し出そうとしました。色彩の明るさにこだわった結果、描写対象であった港の風景は、逆に現実から離れてしまい、その輪郭さえ判然としないものになりました。この実際に見た明るさを見たとおりの色で描くという態度が、後に点描画法を生むきっかけとなったのです。

点描画法は、ご存知のように色彩理論を駆使して、補色関係にある2つの色を混ぜることなく並列させることで、混ぜたのと同じ色彩を生み出す技法です。色を混ぜないことで絵の具の本来の明るさを保つことができます。この技法は絵画の世界に革命的な変化をもたらすことになりました。それまでの絵画は我々の住む3次元世界をキャンパスという2次元の世界に再現させるだけの、いわば仮装の芸術でした。点描画法を用いることによって、3次元世界にある描写対象から離れて、キャンパス上にしか存在しない2次元独自の表現対象を創造することになったのです。

3、影からフォルム

後期印象派に属するセザンヌもまた絵画の2次元の表現の探求にその一生を捧げました。しかし、モネが色彩による絵画表現にこだわったのに対し、彼は構成（フォルム）による絵画表現を模索しました。3次元世界を再現するための手法を放棄し、2次元独自の画面構成のあり方を探求しました。従って、彼の作品には、影を多用した新古典主義の立体的表現は全く見当たりません。彼のこの構成主義ともいふべき思想は、後にマティスのフォーヴィズムやピカソのキュビズムにも大きな影響を与え花開くことになります。

4、カンディンスキーへ

さて、カンディンスキーですが、彼をご存知のとおり、モスクワ大学で法律を学び、30歳まで大学で講師を務めていました。しかし、展覧会でみた印象派の作品に触発されて画家の道に転向しました。

彼の鋭い知性は絵画表現に存分に反映されています。彼もセザンヌの系譜を引く画家として絵画独自の表現方法を模索しています。抽象絵画の先駆者に位置づけられる彼の作品は、描く対象、即ち現実社会のオブジェを意識的にキャンパスから排除しています。その作品をみた人は、何が描かれているのかわからず、しばし戸惑うことは間違いありません。キャンパス上にしか存在しない抽象の世界を描いています。この戸惑いは、あたかも音楽におけるメロディーやリズムが現実世界に存在しないイメージの世界を創造しているのと同じように、絵画が一つの自立的存在として私たちの前に立ちはだかるからでしょう。

このように、印象派が登場したときに20世紀初頭の抽象絵画の到来は約束されていたといえます。印象派からカンディンスキーに至る道のりは、見たものをありのままに描くという現実主義から出発しながら、結局3次元的な現実から離れて行かざるをえなかったという、誠に皮肉な結末を迎えることになったのです。